regret～もう，二度と帰れない世界

桜吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｒｅｇｒｅｔ～もう，二度と帰れない世界

【Ｎコード】
Ｎ００６６Ａ

【作者名】
桜吹雪

【あらすじ】
歩美の様子がおかしい。その事に真っ先に気づいたのは哀だった。どうやら最近、発生したある事件が原因らしいのだが・・・。

1、動きだした針（前書き）

そう，あの時気づいていれば・・・。
もう，気づいた時は手遅れだった。

1、動きだした針

「もう，にげられねえぜ？」

眼鏡をかけた少年は，勝ち誇ったように言った。

「フッ，それはどうかな？」

銀色のマントをなびかせながら，口元に笑みを浮かべて言った。

その2人を遠くで，眺めていた人がいた。

黒く鋭い目で，黒いマントなびかせ，黒く墓場のような心を持ちながら・・・

1、動き出した針

事の始まりは，そう，あのときだった。

あれが・・・，すべての始まりだったんだ。

初詣の帰り，光彦が俺に話しかけてきたんだ。

「コナン君，例の通り魔事件知ってますか？」

「あぁ，毎回なぜかメモをおいてくんだろ？だが通り魔じゃねえよ。

だって，誰も狙っちゃいねぇ・・・。しかし気になるのは・・・」

「みんな，警察官の自宅の前なんですよね？」

「あー，それ知ってるー。歩美のおばさんがね，婦人警官なの。

それで，犯人がメモを置いていったのをみたらしいんだけど・・・。」

突然，歩美が話すのをやめた。

「どうしたんだい，歩美ちゃん？」

「え・・・？いや，なんかその犯人が『ハト』を連れていたんだって。

街灯にあたってわかったんだよ。」

歩美が，焦って言ったことに，この時，コナンは気がつかなかった。しかし灰原は，それをみのがさなかった。

歩美が・・・何かに・・・何かにおびえているのを。

「じゃ～ね～」

「よいお年を！」

「またな！」

3人達と別れ，　博士，コナン，灰原は3人で歩いていた。

「江戸川君，さっきの吉田さんの様子，おかしかったと思わない？」

「えっ・・・？そうか？別にそうは思わなかったけど。」

「・・・，そう。ならいいけど。」

「しかしー，なんじゃのぉ。ほれ，近くのキャンプ場に行く予定だったじゃろ。」

「そういえば」

「どうする？新一。いくのか？」

「バーロ。みんなが計画してたんだ。オレにそれを言う権利なんかねーよ。」

「じゃ，殺されてもいいのかしら？」

「おい！」

「あら？探偵ならもう少しみんなの事，考えられわよね？」

『こいつ，すげームカつく！』

「何か言いたそうね。」

「いや・・・別に。」

「図星ね」

「・・・」

「まぁ，あなたなら行くと言うと思ったわ」

「サンキュ，灰原。ところで，おまえも行くんだろ」

「そうね，今は空いてるしね。いいわ。」

『今は・・・』

「そうと決まったら，土曜日までに用意しないとイカンな。」

「じゃ博士。おれはこっちだから。」

「おぉ，気をつけてのー」

「あぁ」

そう，この時だったんだ。

何もかも，すべてがこの時から始まったんだ。

もう，誰にもと止められない。

止まっていた時計の針が，微かに・・・動き出した。

1、動きだした針（後書き）

作者より

こんちゃー。桜吹雪です。今回が初の投稿ですが，がんばりますのでよろしくお願いしま～す。

びにょ～な物語になるかもしれませんが，かなりの時間をかけて作ります。

誤字脱字もありましたら、笑ってみのがしてください！。

2、悪魔のマジックの始まり

米花町の中でも大きな小学校である帝丹小は児童が多いことで有名である。

ある1年生のクラスだ。

「お～い！」

「おはようございます」

光彦と元太が大きな声で挨拶をしてきた。バカでかい声で・・・

「おぉ，おはよ。」

『なーんか，1人足りねーような・・・」

灰原は一緒に登校してきた。

「・・・，あれっ？歩美ちゃんは？」

「あれ？いつもの待ち合わせの所にいないから，先に行ってると思ったんですけど。」

少したって小林先生が来た。

「おい，まだ歩美来ねーぞ」

「どうしたんでしょうね？」

心配そうな顔をして言った。

「だいじょうぶよ。風邪かもしれないし。」

「そうですよね。そうですよね！」

元気な声。元気を取り戻したようだ。

キーンコーンカーンコーン。

「じゃ，授業を・・・」

先生が教科書を開いたとき，ドアが開いた

『ガラガラ・・・』

「歩美ちゃん！」

「先生，遅れてすいませんでした」

青白い顔をしながら，ふかぶかと礼をしていた。いまにも，・・・泣き出しそうにして。

そう，それは悪魔のマジックのはじまりだった・・・。

2、悪魔のマジックの始まり

「・・・」

「んっ？灰原。どうしたんだ？」

「妙ね・・・。」

「何が？」

「鈍いわね。吉田さんがこんなに遅れる事あったと思う？」

「でも，人間そういうこともあるだろ」

「でも・・・」

「大丈夫。心配ねえよ。」

小林先生は，やさしく教卓の前に立って言った。

「まあ，いいわ。明日からは気をつけてね」

「は・・い・・・」

彼女は，元気のない声で，しかも，震えてていた。

何かに・・・何かにおびえていたようにしか見えなかった。

そう，この時はもう，・・・もう遅かった。

俺達は，黒く汚い手の魔法にかかり始めていた。

もう，手遅れだった・・・。

2、悪魔のマジックの始まり（後書き）

作者より

う～ん，納得いかない（笑）しかーし，がんばっちゃいます。

みなさ～ん，みてねー。

悪夢という正夢

休み時間に歩美の周りには，みんな集まってきた。

「歩美ちゃん，心配したんですよー。何かあったんですか？」

顔を覗き込む光彦に，つい，伏せ目になってしまった。

いつもなら，そうでないのに・・・。

頭に，彼の声が響く。

「何でもないの・・・。そっとしてくれる？」

あまりにも歩美らしくない言葉なのに，

みんなは心配そうに見ながら，自分の席に戻っていく。

しかし，灰原は見たのだった。彼女が，悲しそうに泣いているのを・・・・・。

誰かのために泣いているようにみえた。

悲しいよりも，悔しいという思いのほうが，

とても強く，感じられた。

3、悪夢という正夢

授業も聞かず，ボーッとしていた。

いつもなら，一生懸命ノートをとっているのに。

外ばかり見ていた。

掃除の時間もそうだった。

そのことを，オレは気づいていなかったんだ。

彼女が地獄に引きずり込まれている事に。

キーンコーンカーンコーン

放課後となった。

子供達はみんな，校庭で野球やサッカーを楽しんでいた。

コナン達はサッカーをやっている。とてもキラキラした目で。

それを，歩美は眺めていた。嬉しそうに。

今日は，灰原は日直の当番であった。

灰原が教室にいたことは，歩美も気がつかなかったようだ。

そう，1人だと思って言ったことだった。

教室で哀が日誌をかいていたら，突然，歩美が言った。

聞こえないような微かな・・・，声で。

「コナン君。私が殺されても，生き抜いてね。」

そういって，涙を流した。

哀は，鉛筆を落としてしまった。

落ちた音が，教室中に広がった。

あまりにも・・・わかりやすかった。

彼女がどんな状況なのか。

彼女がどんなに苦しんでいるか。

それを聞いた灰原は，目の前が真っ暗になった。

もう，気づいたころは，何もかも進んでいた。

毎日が，死への行進に変わっていった。

悪夢という正夢（後書き）

作者より

もっと長く書いたほうが良いですか？
一様，３０行超えてます。（笑）
さぁ，どんな物語になるでしょうか？自分でも，モヤモヤです。

4，慌てても手遅れ

「なっ・・・，何をいってるのよ。吉田さん。」

「えっ・・・。」

驚いたように，振り返った。聞かれているとは思わなかったのだろう。

「聞いてたの・・・？」

「えぇ。」

その時，歩美はものすごい声で哀（灰原）に言った。

「お願い！これはコナン君に言わないで。殺されちゃう。」

泣きながら，一気に言った。

4、慌てても手遅れ

「殺されるって，どういう意味よ。」

「・・・。言えない。」

「そう。」

静かに冷静に見せているだけの声で言った。

「でも，事が大きくなる前に言う事ね。そうしないと，もっと彼をくるしめることになるわよ。」

「うん・・・。わかった。」

小さな声でそれだけ言った。

哀は夕食を作りながら，今日の事を考えていた。

『コナン君。私が殺されても，生き抜いてね。』

『お願い！これはコナン君に言わないで。殺されちゃう。』

そんな言葉が頭の中をよぎる。

「どういうことなのかしら。」

少したって博士が帰ってきた。

「スマンスマン，道が混んでおってのー。」

博士は遠くのデパートに行っていたようだ。両手には，家庭用品がある。

「それより料理手伝ってよ。大変なんだから。」

「はいはい。」

夕食は，博士と2人で食べた。

食べている途中，何度も箸を置き，歩美の事を考えていた。

「・・・?。どうしたんじゃ?哀君。なんか悩み事があるのかね。」

「えぇ。」

「なんじゃね，言ってみなさい。」

優しい言葉で心配そうな顔をして言った。

「・・・，実は・・・。」

哀はすべての事を一気に話した。博士は驚きのあまり，反応が返ってこない・・・。

しばらくたって，「なんだって!!!」

「・・・反応が遅いわ。」

「新一君が殺される？歩美君がそんな事を・・・・。」

「ところで，明日のキャンプはどうするの？」

「う～ん。いこう。行っても大丈夫じゃろ。」

「甘いわね。まぁ，いいわ。」

「じゃ，準備の続きじゃ！」

この時は・・・まだ，ただの『火』だったんだ。

だけどこの時から，ただの『火』だったのに，油が注がれた。

キャンプに行く事で・・・・。

魔法も今では，全身で受けていた。

逃げ道も・・・・，小さくなっていった。

4，慌てても手遅れ（後書き）

作者より～

楽しんでいただけたでしょうか？んなわけないか（笑）
ま，怖いけど感動物にしますから。（たぶん・・・）
じゃ，そういうことで。（逃）

5、黒い視線，気づけない心

「わぁー！！！。きれーい！！！」

米花町の近くのキャンプ場に来た少年探偵団一行は，キャンプ場内にある湖に来ていた。

「この湖は，透き通ってるぜ。」

「飲めるか？」

「さあ。」

こんな会話をしながら，湖の周りの道を歩いていた。

「おーい，あんまり遠くへ行くんじゃないぞー」

彼らには聞こえていない。

「あいつら，聞く気ねえな（怒）」

「あら？あなたは行かないの？」

「いつまでもガキといると，疲れちまうからな。」

「それより工藤君，いいかげんわかってあげたら？」

「なにを？」

なーんにも気づいていないようだ。

「何って・・・，吉田さんのことよ。」

5、黒い視線，気づけない心

「へっ？」

目をぱちくりしている。

あきらかに，わかっていない。（怒）

「あまりにも様子がおかしいでしょ？」

「あっ・・，あぁ，まぁな。」

「なら，どうしてわからないの？。あなたのために泣いてたのよ！」

大声でそこまで言い切った。

「灰原・・・？」

「じぶんで，彼女がどんな問題を抱えているか，調べる事ね。」

冷たく言うと，さっさと行ってしまった。

「博士。どういうことだ？」

「君は名探偵なんじゃろ？わかるはずじゃ。」

「わかんねえよ。」

「・・・。それでも，君が気づいてあげるんじゃ。君にしか・・・，できないはずじゃ。」

「わぁーたよ。」

「これ，新一。真剣なことなんじゃぞ。」

その言葉を無視して，先に行った灰原を追っかけた。

『それにしても，歩美が泣く？歩美が？どういうことなんだ？』

そう考えながら走っていた。

冷たい視線も気にもせずに・・・

キャンプは，博士と灰原と歩美で作った。薪は男が持ってくる。（笑）

この時は，いつもの笑顔だった。食べるときも。

そして食べ終わったころ，博士が，

「よし，食べ終わった事だし。きもだめしをしないか。みんな。」

この言葉に2人以外は大はしゃぎ。しかし，

「1人ずつ，むこうのお墓から飴をとってくるんじゃ。」

と言った瞬間，歩美が両腕で自分を抱きしめていた。

それを，博士は逃さなかった・・・。

何かに・・・何かに怯える歩美を・・・。

この時，1人じゃなきゃ，事件は起きなかった。

いや・・・，起きても起きなくても同じかも知れない。

もう，もう，逃げ切れなくなっていた。

魔法は，心まで支配しようとしていた。

5、黒い視線，気づけない心（後書き）

作者より～

なかなか難しい事になっちゃいそうだ・・・。
さぁ，どうなるでしょうか？
次は，事件があ・・・おっと，言いそうだった。
ではでは，またね～～～。

6、死へのカウントダウン

コナン達は夕ご飯の片付けが終わり，きもだめしをやる事になった。

「じゃ，くじで順番を決めようかの。」

「光彦，おまえ先やれよ。」

「元太君こそ，どうぞ。」

2人の言い争いは止まらない・・・。

「これこれ，くじを早く引くんじゃ。」

「げっ，おれ一番だ。」

「ぼく，3ばんです～。」

「コナンは何番だよ?」

「4番，」

「私は2番よ」

「歩美ちゃんは?」

「5ばんだよ。」

元気ない声で言った。

「じゃ，始めようかの」

「元太，がんばれ！」

「・・・。おどかすなよな。コナン」

きもだめしは始まった。

これから起こる事も知らないで・・・。

6、死へのカウントダウン

「次はオレの番か・・・。」

もう，4番までまわっていた。

「飴はヨーグルト味だったな。」

「違いますよ！ミルクです。」

「ヨーグルト！！！」

「ミルク！！！」

争いは終わらなーい（笑）

さあ，きもだめしの方に話を戻します。

コナンは墓に入った辺りを，歩いていると

「ガサガサ・・・。」

と，林から音がした。

「だ，誰だ！」

そう言うと同時に，誰かが立ち去って行った。

「待てっ！」

しかし，コナンでは追いつけなかった。

「何なんだ？」

コナンはキャンプ場に戻ってきた。

それと同時に，歩美が出発して行った。

「なぁ，灰原。」

「何？」

いつものように，冷静な口調だった。

「あのさ，おまえ行ったときには誰かいたか？」

「誰もいなかったわ。」

「そうか。」

「どうしたんだね？」

「いやっ，なんかオレが歩いてたら，逃げていった奴がいるから。」

その言葉に，哀と博士は息を飲んだ。

「・・・，追うんじゃ，新一。」

「誰を？」

「歩美君が危ない！」

「歩美ちゃんが危ない？」

そう言ったのは，光彦だった。

「僕も行きます！！」

「オレも！！」

元太も言った。

「ダメじゃ！！！。新一，早く！，早く！！！」

そのことがようやくわかったような顔をしているコナンは，全速力で追っかけた。

周りは，もう，すっかり真っ暗だった。

その頃は，死への行進は・・・，死へのカウントダウンになっていた。

それは，1人だけではなかった。

これは，1人が少し早いだけで，毎日のようにカウントされていくのだった。

時計の針を誰かが・・・・・，進めていた・・・。

逃げ道も，なくなっていた。行く道はひとつだけ。

行く道も決まっていた。

7、忍び寄る人影

どれだけ走ったか。

そろそろ追いついても良いころだ。

ライトの明かりが見える・・・。歩美のようだ。

「きゃぁぁぁぁぁ。」

コナンに緊張がはしった。

7、忍び寄る人影

コナンがキャンプをやっている頃の，毛利探偵事務所。

「も～。お父さんったら，また麻雀？」

「そうだよ～ん！じゃ，あとはよろしく～～～。ガチャ。」

「ちょっ，おとーさん？」

『ツーツーツー・・・。』

「もう～。」

テーブルには空き缶，タバコ，いろいろありすぎる。

沖野ヨーコの雑誌も何冊もあった。

蘭は仕方なく，掃除をし始めた。

その頃，コナンは目の前の光景を目にして目を疑った。

・・・歩美にボーガンの矢が2本，ささっていた。

「あ，歩美！しっかりしろ！歩美！歩美～！！！」

と，その時，人影が去っていくのを見た。

「まっ，待て～！」

今，追ってしまっては，歩美が危ない。

叫び声を聞いて，人々が集まってきた。

人々は驚いた様子だった。

「救急車を呼べ！，早く！」

１０分後，救急車が到着し，歩美は近くの米花中央病院に搬送された。

とにかく，博士が歩美の親に連絡して，来てもらった。

歩美は，集中治療室に入ったまま，なかなか出てこなかった。

「なんで，こんな事になっちまうんだ？」

「犯人を捕まえてやりましょう！」などと，話していた。

博士は，自分の責任だといっていたが，歩美の母親は，気にしなくて良いと言ってくれた。

「子供は遅いから帰りなさい。」

いつもより，きつく博士が言った。

「嫌です。」

「帰るなんてしねーぞ。」

２人は拒否。

「哀君もコナン君も帰るんじゃ。」

「・・・わかったわ。」

「オレも。」

そのとき，「コナン君は，いて頂けますか？」

「えっ？」

「歩美の意識が戻ったときにコナン君がいてくれたら，喜ぶと思うからね。」

焦ったように一気に喋って言った。

「それなら，僕達もいます。」

「君達は帰るんじゃ」

博士が無理やり説得し，なんとか光彦達は帰った行った。

その様子をうれしそうに，遠くから見ていた人影があった。

病院の待合室は，静けさそのものだった。

沈黙が流れていた。

コナンの様子を監視する者は，静かに笑った。

コナンの影からゆっくり，ボーガンの矢が解き放たれた。

まだ，第一楽章も終わっていない。

死までを数えるほど，余裕はなかった。

もう，戻れない迷路に入っていた。

普通の者には想像できない。

ただ人を殺すわけでない。

もっと，もっと周りを苦しめる。

それは・・・決して楽しめないはずだった。

もう，心が汚れることを止められない。

この暴走を止めるのは，警察にも・・・無理だ・・・。

7、忍び寄る人影（後書き）

作者より～
終わり方のネタがなくなっちゃった・・・。
どうしよ～う～。
あと，全部で５０話くらいになってしまうと思います。
まぁ，読んでくださいまし。

8、第一楽章の終わり

コナンは，米花中央病院にいた。

本来なら人を助ける場所がまさか，

人を地獄へ連れ込むとは，思ってもみなかった。

歩美の無事を願っていたコナンは，背後の影に気にしなかった。

それが・・・事件に肥料をまいたようなものだった。

そして今，コナンの影からゆっくり，ボーガンの矢が解き放たれた。

8、第一楽章の終わり

コナンは気がつかなかった。

気がついたのは，歩美の母親だった。

「あぶない！」

そう言ってコナンを突き飛ばし，自分から刺された。

そして，倒れてしまった。

「おばさん！しっかりしてよ。おばさん！」

もう，気を失っていた。

それと同時に，脈拍数が高くなってきているようだ。

汗をすごくかき始めた。

「チッ！」

そんな声が後ろから聞こえた。

この待合室で2人だけのはず。

歩美の母親を狙った犯人に違いない。

「待てっ！」

一目散にその人影を追いかけた。

影のあった角を曲がったところ，

もう，そこには犯人はいなかった。

『なぜだ？なぜオレの周りで・・・』

博士が迎えに来る頃には，警察が来ていた。

俺達は歩美の手術はまだかかる様なので，

帰路についた。

外は雨が降り始めていた。

帰りは博士と話をしながら帰った。

「なぁ，博士。これは組織の仕業なのか？」

「あぁ，その可能性もあるじゃろ。しかし・・・」

博士が突然，考え始めた。

あごに手を当て，真剣に。

「しかし・・・なんだよ？」

眉をよせて聞く。

「いやっ，新一を狙う事はあると思うけど，

歩美君まで狙うというのは，おかしくないか？」

博士は軽く睨み付けて言った。

「・・・あぁ。オレも気になってたんだ。」

そう言って，早や歩きになった。なんかあるようだ。

「こっこれ！」

博士も早や歩きになった。

コナンは阿笠邸に入ると，地下室まで一気に降りた。

ドアを開けると哀がそこにいた。

「何？」

冷酷な言葉で聞く。大人びた口調だ。

「歩美は・・・あのとき・・・あのとき学校で何があったんだ？」

走ったせいで息がきれる。

「・・・わからなかったの？簡単なはずよ。」

「いいから教えろ！」

『お願い！これはコナン君に言わないで。殺されちゃう。』

こんな言葉が浮かんでしまった。

だから・・・彼女との約束を守るために・・・

「言えないわ。」

「なんだと！もっと殺されるかも，しれないいんだぞ！！！」

「吉田さんとの約束よ」

「そんなの関係ねー」

「今言っても，わからないだけよ・・・」

「そうか・・・」

そう静かに言うと，階段を上がって行った。

玄関の所で哀が走ってきた。

「・・・？何だよ？」

「・・・気をつけて」

「あぁ」

もう，外は土砂降りだった。

長い一日が終わりそうだ。

だが，まだまだ危険がありすぎていた。

第一楽章が終わりに近づいていた。

まだ，指揮者は演奏を続けている。

止まらない，止まらない・・・。

9、死を覚悟の上のような事

コナンは土砂降りの中，走って帰った。

「ピチャッ，ピチャッ」

コナンの走る音だけ響く。

探偵事務所に帰ると，蘭が驚いたような顔をして言った。

「コッ，コナン君！キャンプはどうしたの？」

「えっ，なんか，殺人未遂があって。」

「え～。誰が？」

心配そうに，コナンの顔を覗いていった。

「歩美ちゃん・・・」

「えぇ！？。でも，助かったんでしょ？」

「うん。入院したけど・・・」

そこまで言ったところで，電話がかかってきた。

9、死を覚悟の上のような事

「はぁーい，こちらぁ・・・毛利探偵事務所でーす」

思いっきり酔っている。

「あの～。円谷なんですが。」

その言葉でコナンが反応する。

「こな～ん。でんわだぞ～～～。ヒック。」

思いっきり酔っている（笑）

「光彦か？どうした？」

「いやっ，実は・・・。死神のカードがドアに挟まってて・・・。
」
「なに!!!」
そして，コナンはドアまで走って行った。
そこにあるものは・・・，まさしく死神のカードであった。
「どうしたんですか?コナン!」
電話の向こうで叫んでいる。
「あっ，あぁ。オレの所にもあったよ・・・。」
「ほんとですか!」
「あぁ。」
「どっ，どうしましょう」
かなり焦っている。いつも声ではない。
「明日，博士家に集まろう・・・。」
「そうですよね。元太君には僕が言っておきます」
「あぁ，じゃな」

そう言って電話を切った。

そして，手元にある死神のカードを・・・・，見た。

なぜ？・・・・

そうしか思えなかった。

なにが・・・なにが起こっている！？

次の日，少年探偵団は博士家にいた。

「どういうことなんですか？」

「オレにもわかんねーよ。」

沈黙。

「しかし，なんか・・・。なんかしっくりこんなぁ」

「あぁ」

「なんか僕達に恨みがあるのでしょうか？」

「そんな覚え，ねーぞ！」

「犯人は，私達の命を狙っている事は確かね・・・」

「何でですか？」

恐れながら聞く光彦に，誰も言う事はできなかった。

再び沈黙。

「あんまり話し合う事，ありませんよね・・・」

「それより歩美の所に行こうぜ！」

「そうじゃな。お見舞いに行こうか」

「そうね。」

静かに5人は出発した。

ー米花中央病院ー

中に入ると，さすがに大きい病院のため混雑していた。

静かに廊下を歩く。

その歩いている影に，新しい影が重なっていった。

4人は病室に入った。

恐る恐る，ベットのほうに近づく。

そして，静かに眠っている歩美を見た。

それを見ると『ホッ』とした。

まわりの様子も変わっていない。

そして歩美のベットを，なんとなく見た。

その瞬間，５人は凍りついた。

ベットにナイフが刺さっていた。

コナンは近寄ってみた。

何か，ナイフの先に刺さっている。

コナンがそれを見た瞬間，顔から血の気が一気に引いた。

それは・・・，何枚もの死神のカードだった・・・。

もう，どうしようもなかった。

とても怖いではすまない。

死を覚悟の上のような事。

時計の針は壊れたように，早く，早く回っていた。

１０、朝を見る事のできない僕達

ー米花中央病院ー

廊下は人影さえ，見えない。

窓は開いているため，静かにカーテンが揺れていた。

死神カードが不気味に笑っていた。

ほんと，目の前にある事楽しんでいるように・・・。

１０、朝を見る事のできない僕達

「何なんじゃ！これは！？」
「死神のカード・・・」
「あぁ，そうだな。」
「まさか！」
「同一人物ね」
カーテンが揺れている。夏の眩しい光が差し込んできていた。

「吉田さん親子は，とても早く退院できそうですよ。」
カルテを見ながら，医者はコナン達に言った。
「そうですか。よかった～。」
「毎日，見舞いに来よーぜ！」
2人とも安心したように歩美のために，何ができるか話し合っていた。
歩いている廊下は，とても蒸し暑い。
廊下にはコナンたち以外いない。
「しかし・・・どういうことなんだ？」

光彦と元太が離れているのを見て，コナンが切り出した。

「吉田さんだけを狙っているのかもしれないわよ」

「いやっ，そうではないと思う。光彦や元太の家にもカードがあったんだ。

しかも，おれも狙われている・・・。」

拳を震わせている。

「しかし，危ない事になっているのは確かな事じゃ。」

続けてコナンの顔を見ながら言った。

「新一。無理しないんじゃぞ」

「あぁ。」

ゆっくり頷き，そう一言だけ言った。

事務所につく頃は日が傾いていた。

「そういえば今日は朝やけだったっけ。」

まるで，これから起こる事を象徴しているようだった。

探偵事務所に帰ると，蘭が食事を作って待っていた。

「コナン君遅いよ。夕ご飯できてるから食べよう。」

そう言っているのが台所から聞こえた。

「はぁーい」

そんな言葉で返し，蘭の手料理を楽しんでいた。

その様子を・・・

白く清潔感あるハトと，黒く鋭い目をしたカラスが見ていた・・・

。

ー次の日ー

「おはようございます！」

「おっす！」

「あぁ，おはよ」

2人は元気良く挨拶をしてきた。

「今日もお見舞いしようぜ」

「そうですね！」

歩美がいなくても盛り上がりっぱなし（笑）

学校に着いた頃には，予鈴がなっていた。

「ふー，セーフですね」

「コラ！もっと早く来ないとだめじゃない」

小林先生が易しそうに言った。

「すみませ～ん」

そのとき光彦と元太が，同時に顔色を変えた。

「あっ・・・，あああぁ・・・。」

後ずさりしながら言った。

「・・・？どうした？光彦，元太」

「つっ，机の上が・・・」

「！！！」

歩美の机の上には明らかに，なにか乗っている。

そして，それが何かが分かった。

大きな死神のカード・・・その上に歩美の写真があり・・・，

×と，書かれていた。

標的と言っているようだ。

周りにも生徒が集まっていた。

「誰ですか!?こんなこととしたのは!」

「せんせー，来たときからありましたよ」

「・・・」

コナンは，どう考えていいかさえ，わからなくなった。

学校は休校となった。

テレビなどは「イジメ」と取り上げていた。

博士にそのことを話した。

「なんじゃと!!!」

「いったい，どういうことなんだろう・・・?」

灰原は地下にいるようだ。

博士がついだコーヒーが湯気をあげていた。

ゆっくり，ゆっくり天井にいく。

「新一，歩美君と歩美君のお母さんは何かがおかしいと思わんか・・・？」

「えっ，あぁ。まぁな」

「歩美君のお母さんに聞いてみれば，何かわかるかも知れんぞ」

「わかった」

そう言うと，ついであったコーヒーを一気に飲んだ。

後味に苦味がいつもよりもきた。

外に出ると夕方だった。

これから雨が降るようだ。

もう，とうぶん太陽を見る事はないだろう。

僕達と同じように・・・。

１０、朝を見る事のできない僕達（後書き）

今回は長めです！テストで投稿してなかったから！
さぁ，どうなるでしょうかね？
次回をお楽しみに。

11、KID of the thief and Black Murder

夜，コナンは病院に行った。

歩美のお母さんはここにいるようだ。

傘を持たずに走ってきてしまった。

その様子は，黒く鋭い目をしたカラスが見ていた。

その足には発信機があった・・・

11、KID of the thief and Black Murder

病院に入って自然と足早になり，階段を上る頃には走っていた。

「コラッ，歩きなさい！」

そんな医師の言葉は届かなかった。

なんか焦っていてしまった。

息を切らし，５階まで全力で駆け上がり，

角を曲がり，連絡橋を渡った。

入院患者に会うには，この連絡橋を渡らなければならない。

右に曲がり，エレベーターで１０階までいく。

コナンが走って，入院している所に着く手前の，

受付の所で呼び止められた。

「コナン君。」

その言葉は歩美の母の声だった。

「おとーさん！今日もマージャンなの！？」

「そうだよ～ん。ガッ八ハッハ！明日には帰るゼイ。じゃ～ね～。ガッ八ハッハ」

「ちょっと，おとーさん！？」

「ツーツーツー・・・」

「まったく。」

今日もまた，蘭は仕方なく掃除をし始めた時だった。

電話がかかって来た。

「もしもし，目暮なんだが・・・」

「はい，もしもし」

「おー，蘭君か？毛利君をだしてくれんか？」

「すみません。マージャンに行ってしまっているです・・・。」

「ったく。まぁ，いい。今，めもってくれんか。」

「はい」

「実は，警視庁に・・・」

その言葉をきいた蘭は，唾を飲み込んだ。

病室のまえに2人，腰かけていた。
外では大雨らしく，屋根に当たって音を上げていた。
時々雷が落ちている。
静けさが廊下中を覆っていた。
その中で，口火を切ったのは歩美の母だった
「コナンくん。落ち着いて聞いて欲しい事があるんだけど・・・」
「はい」
「実は，キャンプの日の5日前に電話がかかって来たの。
その内容は『コナン君の事を狙われたくなければ，コナンのことについて教えろ。』っていうのだったの・・。
なにかあったの？なんで狙われてるの？コナン君？」
「いっ，いや。」
言えるはずない。自分が『工藤新一』という事は・・・。
「そう・・・。阿笠さんには後で言っておきます。言いたい事はそれだけよ」

「明日も，お見舞いに来ます。」

そう言うと，ニコッと笑って，

「帰るときは気をつけてね」

とだけ，言った。

外に出ると，雨は続いていた。

雷は収まったようだ。

しょうがなく，雨の中を走って帰った。

ー毛利探偵事務所ー

コナンが帰ってくると，蘭がタオルを持ってきた。

着替えた後，蘭が思い出したように言った。

「あっ，コナン君。さっき，目暮警部から電話があったんだけど・・・」

その言葉に，すぐ反応した。

「なんて言ってたの。」

「怪盗キッドから挑戦状がきたのよ♪」

うれしそうに言った。

「あと『Ｂｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒ』っていう名前で送ってきた物もあったらしいんだけど，それが・・・」

とたんに，怖い顔になった。

コナンにも緊張がはしった。

「じつは，手紙の始まりが・・・」

そう言うと，一枚の紙を出した。

電話で聞いたのを移したんだろう。

それは，すごいものだった。

『さぁ，毎日ビックなイベントを親愛なる警察殿にプレゼントしよう。

僕は，毎日１０人を殺しても物足らないんだ。

今のところは２００人くらいしか殺した事がない。

これからは，もっと楽しませてもらうよ。

毎日の事件でヒントを出してあげよう。

それを追ってくれば僕の場所が分かるかもね。

がんばってくれたまえ。親愛なる警察殿。

Ｂｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒ

『

その手紙を見た瞬間，怒りより，顔が青くなっていくのがわかった。

目を見開いたまま，動かなかった。

頭が真っ白になった。

外は雨がまた，強くなった。

もう，朝が来ないのだろうか・・・？

11、KID of the thief and Black Mur

～作者より～

楽しめていただけましたか？
これからですよ楽しくなるのは（笑）
１０話と１１話は長めにしてあります。
まぁ，文句や感想があれば，掲示板に書いてくださいね。

１２、黒き殺人者

アスファルトには，雨が殴りかかるかのように降っていた。

コナンにその音は，強く，そして

自分に殴りかかってくるように思えた。

そう，それがメインイベントであった。

１２、黒き殺人者

沈黙は3分間に及んだ。

「ねぇ，キッドはどんなのを送ってきたの？」

あくまで冷静でいようと思ったコナンは，焦りながらも言った。

「あっ，うん。これよ」

そう言うと，メモを受け取った。

それには5枚と書かれており，一枚目から順になっていた。

一枚目は，『馬』

二枚目は，『銀』

三枚目は，『龍』

そして四枚目は，『ごきげんよう。

満月が私の影をつくる頃，

王の前から香る火のように

わが身に相応しい『ブラックシルバー・スカイ』を頂きに参上する。

怪盗キッド』

「へ？・・・・」

情けない言葉を発している事に気が付かなかった。

いや，気づくはずがなかった。

二つのことが同時に来ることで，コナンの思考回路はメチャクチャだった。

少し開いている窓からは風が小雨混じりに入ってきた。

風が涼しい。

とそのとき，ちょうど迷探偵が帰ってきた（笑

「くわぁえってきたぞぉ～」

そんな大声は蘭を怒りの頂点まで達せるくらいだった。

周りの家は明かりさえ点いていなかった。

静けさが続いていた。

それは今日まで。

１２時過ぎ。

静かな幕開けだった。

「佐藤君，中森警部に連絡は済ませてあるのかね？」

朝早く出勤した警部は，まだ熱いコーヒーを飲みながら言った。

ここは，警視庁捜査一課の会議室。

今日は，朝早くから会議があった。

「はい。大阪府警察本部に対策本部ができたみたいです」

「そうか。府警には早めに行くか。高木！君も用意をしておきなさい」

「えぇ！！！僕もですかぁ？！」

「当たり前だ。早くしろ」

「は，はぁ」

言われるままに用意する高木刑事を

観察するかのように見る者がいた。
冷たい視線にまるで気がつかない。
「ようし，いくぞ」
そう言うと警視庁を出て行った。

「よう，コナン！」
「おはようございます」
「おはよー，コナン君」
前のように3人がやって来るのが見えた。
歩美は少し歩きずらそうに足を引きずりながら，一生懸命，笑顔を作っていた。
作り笑いだと分かっていても，それが明るくて心がこもっているその声に，
笑みをこぼした。
「おはよ。そういえば今度みんなで遊園地いかないかって，博士が言ってたわよ」

いつもどおりの冷静な声で言った。

「ほんとー！？やったー！」

3人は大きい声を出して，手をたたいて喜んだ。

遊園地では何をするかは，しゃぎながら歩いていると，

悲鳴が聞こえてきた。

「きゃゃゃゃゃぁぁぁぁぁ」

目の前の郵便局を左折すると，衝撃な光景があった。

5人ほどの中学生，高校生が血を大量に出して倒れていた。

今から救急車を呼んだところで間に合わない。

周りには衝撃な光景に，泣き崩れる者もいた。

しかし，誰がやったのだろうか・・・？

「ポタッ，ポタッ」

そんな音が聞こえてきた。

血・・・？そうしたら，上に死体があるのか？

そんなわけない。・・・もしかしたら・・・！

コナンは勢い良く，顔を上げた。

歩美もコナンに連れられて，顔を上げてしまった。

それは，何度も目をこすって確かめたいくらいだった。

コナンが見る先には，キッドに似た格好をした者がいた。

違うところと言えば，黒く，手に血がついた短刀があった。

その顔からは，余裕とでも言うような笑みを浮かべていた。

黒いマントは風で靡いていた。

「よう。ひさしぶりだな，吉田君，シェリー。

そして，初めまして。探偵君？」

そこまで言うと，短刀をコナンたちの目の前に落とした。

血がまだ乾いていない。

歩美と哀が震えている。

コナンはその様子を確認し，唾を飲み込むと，乾ききった唇を舐めた。

Ｂｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒ　。

それは，黒き殺人者。

傷ついた心は，何人殺しても癒される事などない。

退出のできないコンサート。

逃げ出せるわけなかった。

１２、黒き殺人者（後書き）

～作者より～

こわー。怖いです。殺しちゃいました。
なんかこいつ，人間なの？と思っていただけると・・・うれしいですね。
こいつは若く設定しています。
キッドより若いつもりです。
じゃ，そういうことですら。

１３、点滅している青信号

朝から汗ばむような暑さが続いている。

今日はセミが鳴いている。

アスファルトからは，じりじりとした暑さが伝わってくる。

コナンたちは氷を突き刺されたように冷たく，心に迫ってくるようなものを感じていた。

Ｂｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒ　。

死体を見て静かに笑う，黒き殺人者。

今，コナンには周りの声なんて聞こえなかった。

１２、点滅している青信号

「ピーポーピーポー」

救急車と警察がやって来たようだ。

合わせて１０台くらいだろうか。後ろの方にはテレビ局の車が見える。

Ｂｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒ　は黒いハングライダーを広げると，こう言った。

「じゃぁな，名探偵。これで終わると思うなよ。

まだまだ，楽しみは後に残しておくよ。」

そう，ニヤッと笑うと飛んでいってしまった。

飛んで行った後には，死体とコナンたちだけが残されていた。

後ろを通り抜ける風が，いつもより冷たく感じた。

コナンたちは学校が終わった後，警視庁で取調べを受けていた。
報道陣は第一発見者が小学生と言う事で，
情報をいち早く得ようと，警視庁は報道陣でいっぱいだった。
「コナン君，その男の特徴について詳しく教えて。」
さっきから，捜査一課の部屋の外では報道陣がいてうるさい。
「怪盗キッドの黒バージョンかな？そんな感じだよ。」
「じゃあ，その男どのくらいの背？」
「意外と低いと思うよ。１６０から１７０かな。」
「なるほど」
白鳥警部は聞いた事を，警察手帳にきれいに書き込んでいる。
部屋の外ではいろんな声が飛び交っている。
「まだ取り調べは終わらないんですか？」
「会見はどうするんですか？」
「うちの番組に出て欲しいんだけど。」

四方八方から出てくる。

「待ってください。押さないでください」

入り口を守っている警官も限界に来ている。

「そろそろ，子供達を返した方が良いんじゃないか」

他の刑事が言った。

「そうですね。裏から車で阿笠さんとこまで送りましょう。」

コナンの横にいた3人が言った。

「あれっ，高木刑事と佐藤刑事は？」

「あぁ。彼らは目暮警部と，怪盗キッド対策として大阪に行ってるよ。」

「ふ～ん」

何も疑わない子供達にほっとしたのか，白鳥はため息をついた。

それを灰原は，じっと見ていた。

「じゃ，行こうか」

そう言うと，6人は警視庁を出た。

テーブルの上の灰皿が，夕日を浴びて鈍い光を放っている。

また，夕立になりそうだ。

「遅くなってしまいました」

「いえいえ，とんでもない」

阿笠宅に着いた車から出てきた白鳥は，眠ってしまっている子供達を運んでいた。

「じゃ，私はこの辺で」

そう，ボソッと言う白鳥に，阿笠は聞いた。

「あの，白鳥さん。なんか子供達の見た事件はテレビで放映されていないんじゃが・・・」

「さぁ，分かりません」

微妙に顔色が変わった事を阿笠は見破っていた。

「今回の事件，なんかあるんじゃないかのぉ」

下を向く白鳥に疑うような口調で聞いた。

「実はＢｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒという者と，怪盗キッドから同

時に文書が送られてきたんです・・・。

今日のコナン君たちが見たのはＢｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒでしょう・・・」

「そうなのか」

歩美に嫌がらせをしていたのはＢｌａｃｋ　Ｍｕｒｄｅｒだったのか。

「じゃ，何かありましたら，警視庁まで」

そう言うと，車を走らせて行ってしまった。

その様子を見送る阿笠の後ろには，黒い羽が落ちていた。

１３、点滅している青信号（後書き）

熱いですね・・・
点滅している青信号とは，もうすぐ赤に変わる。
つまり，終わりに近づいていると言う事。話は長くなりますけどね。
次回は真っ白な・・・かな？

１４、迫り来る予感

「フフフッ，そろそろか？」

小中学生が帰るスクールロード。

その陰に隠れている者は，静かに笑っていた。

小学生だろうか？こっちに歩いてくる。それも一人ではない。

６年生が先頭で１０人ほど，ゆっくり歩いてくるのが見える。

朝からアスファルトから伝わってくるジメジメしている暑さは，身をだらけさせている。

黒いマントの男は，汗をかきながらも気にしていない。

手には何も持たない。

路地の陰から出てきた者は，襲い掛かった。

１４、迫り来る予感

まだ蒸し暑さが残る残暑で，廊下は蒸し風呂状態である。

生徒達は出来るだけ暑さをしのごうと水を頭にかけている。

コナンは今日は早めに登校し，教室のテレビで，警視庁が発表する事にした，この間の事件を見ていた。

警視庁はまだ，挑戦状については発表していないようだ。

そのとき，いきなりドアが開いたと思うと入った来た少女は自分の方にやった来た。

「遊園地，だめだって。」

廊下を走ってきて，息を切らしているのに，平気なように話しかけてきた。

「えっ，どうして」

くだらねぇ，と思ったコナンだが，一様聞いてみた。

「昼間は用事が合っていけないから，夜の東多摩タワーにいこうって！」

そして続けて，

「それに，『ブラックシルバー・スカイ』も見れるんだよぉ！」

「マジ？」

「ほんと，ほんと！まじまじ！」

『と，言う事は東多摩市かぁ。碁盤のようになってる最近出来た市だったな。』

歩美は光彦や元太に夜に行かせてくれるか聞いている。

授業中は集中できなかった。

問題が優しいからというわけではない。

いま，この瞬間に　あ　い　つ　が来るかも知れない。

そう思うと，鳥肌が立った。

なんだか，寒い。

まだ，夏だがセーターを着たい。

タバコ屋の角を曲がると，この間の事件現場があった。

血が生なましい。俺はここにたって，あいつを目の前にして，

何を出来たのだろうか？

歩美にも被害があったみたいだし・・・

俺には人を守れるのか？

俺にはそこまで，力があるのか？

ポアロの横を通り過ぎると，その脇にある階段を上り始めた。

探偵事務所の階段を上っていると，なんか身に覚えのある関西弁が飛び込んできた。

「だーかーらー，夏の間，その挑戦状出したもんを探すんだから，事務所に止めてくれや！」

服部か？

コナンはドアを開けると，話していた色黒い少年が振り向いた。

「おぉ！お帰り」

「お帰り！コナン君！」

服部と和葉ちゃんも来てたのか。

目で合図して，上の家の方に来るように言うと，上に上っていった。

「なんや，どうしたんや？」

ドアを閉めると，服部はキツイ顔になって，そう，言った。

「実は，その挑戦状を出してきた奴は殺人犯なんだ・・・。」

「そら，捕まえないといかんな。」

服部の奴，，，俺の気持ち，わかってんのか？

「そいつは，なんとなくだけど他の奴とは違うんだ。何かが・・・」

「気のせいやろ？」

「そうだといいけどな。・・」

「んじゃ一旦，大阪にかえるわ。毛利のおっちゃん，怒ってるからな」

ニッ，と笑うと　そのまま帰っていってしまった。

階段を下りていく音が，耳にいやに響く。

付けっ放しのテレビには，米花町の殺人現場が映し出されている。

机の上にあった花も枯れ始めている。

水を取り替えなきゃ。

１４、迫り来る予感（後書き）

～作者より～

いやーお久しぶりです（汗　桜吹雪です！
試験が忙しくて。。。
これからはもう少し来るようにします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0066a/

regret～もう，二度と帰れない世界

2010年11月5日19時57分発行